View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE



【論　文】

# 環境人文学と医療人文学の交差点
## ―新型コロナウイルスの時代に―
## Intersections of the Environmental and Medical Humanities in the Era of COVID–19

森田　系太郎*
MORITA Keitaro, DBA

［要旨］
本稿は、セクション１であるイントロダクションの後、セクション２で環境人文学を、セクション３で医療人文学を概説する。この２つのセクションでは、環境人文学の主眼は人間と自然との関係性に、医療人文学のそれは医師を含めた医療従事者や患者等の人間同士の関係性にある、といった差異はあるものの、取り扱うトピック等、共通項・類似点が多いことを確認する。その後、セクション４では両人文学の交差する点を考察する。同セクションは（1）と（2）から成り、（1）では２つの人文学がどのように協働できるのかを両人文学の大きな柱の１つである文学に焦点を当てて考察し、（2）では新型コロナウイルスの時代における２つの人文学の協働のあり方を検討する。コロナ禍を経験してしまった私たちは、もはや〈コロナ〉という変数を抜きにしては何事をも語ることはできなくなったからである。そして、〈人新世〉は環境人文学のキーワードだが、新型コロナウイルスが〈人新世〉の病の１つだとしたら、これから益々、環境人文学と医療人文学は協働していかなければならないのだ。
キーワード：環境人文学、医療人文学、人新世、新型コロナウイルス

## 1.　イントロダクション

――「これまでの時代において、人文学は主に平時の学問だった。」（西谷地 2020：177）

新型コロナウィルス（COVID–19）は第一に医療の問題と捉えられているし、実際に医療の問題である。しかし新聞等の報道を眺めているだけでも、環境問題との関わりも無視することはできない。その論調としては以下の５つの説に纏めてよいだろう。

*立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科・異文化コミュニケーション研究科・兼任講師

①「新型コロナウイルスは環境（破壊）から生じたものである」という起源説
②「新型コロナウイルスへの対応の在り方から環境問題も学ぶべきである」という教訓説
③「新型コロナウイルスに対応する中で環境問題を忘れてはならない」という警鐘説
④「環境における種の多様性がウイルスの急速な拡散を抑制する」という抑制説
⑤「今回のパンデミックにより経済活動が停滞し温室効果ガスの排出量は減少しているが、経済回復の際には環境にも配慮した回復が欠かせない」というグリーン・リカバリー（緑の回復）説

いずれの説であっても、新型コロナウイルスという（第一義的には）医療問題と環境問題とは連関性がある、と主張している点で共通している。

筆者の専門は環境人文学であり、また最近は、学問分野として成熟してきた医療人文学にも関心を抱いている。言うまでもなく、医療問題、環境問題は様々な視点から取り組むことができるが、本稿ではその視点を人文学に絞りたい。そして以下、セクション 2 では環境人文学を概説し、セクション 3 で医療人文学の概要を確認した後、セクション 4 では両人文学の交差する点を考察してみたい。

## 2. 環境人文学

環境人文学は、〈環境〉＋〈人文学〉と因数分解すると分かりやすいが、文字通り「環境問題の人文学的研究」（結城 2017：236）であり、広く定義すれば「人間と自然の関係の学」（野田研一の発言；野田・赤坂 2020：10）である。より丁寧に定義すれば、「人文科学の分野から、人間と環境の関係、および、自然観や環境をめぐる価値観、倫理観を形成してきた文化的、哲学的枠組みを探る研究の総称」（豊里 2014：275）であり、環境問題のなかでも「定量化されづらい側面に注視する」（山本 2017：i）学問分野である。その目的は「地球環境と人間をとらえなおすため」（豊里 2015：104）であり、「とりわけ二〇一〇年以降」（結城 2017：236）に登場した人文学の一種である。環境問題が人為的行動によって生じているのであれば、そして Spector と Kitsuse（1977）が言うように、あらゆる社会問題は社会的に構築されているとしたら、環境の問題は人間の問題で（も）ある。ここに環境〈人〉文学の存在理由がある[(1)]。

それ以前より、欧米の文脈では環境人文学に係る文献は出版され始めていたが、日本におけるその嚆矢は『文学から環境を考える　エコクリティシズムガイドブック』に掲載された豊里真弓（2014）によるキーワード解説「環境人文学」だろう。翌年、豊里（2015）は論文「環境人文学と文学研究」を著し、日本における環境人文学研究を一歩先に進めた[(2)]。

ちなみに、上記で引用した豊里も結城正美も、ともに環境文学研究者であり、環境批評家（エコクリティック）である。また『文学から環境を考える　エコクリティシズムガイドブック』の執筆者のほとんどが環境文学研究者である。これは、賛否両論あるが、環境文学研究は勃興期から学際的な指向を内包しており、それが環境人文学という分野の成立を導いた（Heise 2013：641）という説もあり、現在も特に日本では、

筆者を含め、環境文学研究者が環境人文学を牽引していると言ってもよい。実際に、環境文学研究者で文学・環境学会（ASLE–Japan）の初代会長である野田研一も、「環境人文学の柱」（野田・赤坂 2020：9）として環境文学研究を位置付けている。

環境人文学の射程は多岐に渡る。領域横断的な学問領域であるからである。含まれる分野を列挙すると、「環境史」「環境人類学」「環境地理学」「環境文学」「環境社会学」「環境経済学」「環境政治学」「環境思想・哲学」（結城 2017：235）、「文化・生物人類学」「文化地理学」「政治生態学」「コミュニケーション・メディア研究」「ジェンダー研究」（Heise 2014）、「環境心理学」「環境教育（学）」「環境言語学」「環境考古学」「環境倫理学」「環境宗教学」「環境音楽学」「環境芸術学」（以上、著者による追加）と枚挙に暇がない。この領域横断性は、日本初の環境人文学に係る研究書として著者が編者の１人として関わった『環境人文学Ⅰ　文化のなかの自然』『環境人文学Ⅱ　他者としての自然』（ともに野田研一・山本洋平・森田系太郎［編著］、2017 年、勉誠出版）の目次を眺めてみても明らかである。

『環境人文学Ⅰ＆Ⅱ』と同時期に、またはそれ以降も、環境人文学の要素を取り入れた研究が矢継ぎ早に出版されている。『環境人文学の地平』（白百合女子大学　言語・文学研究センター［編］、2017 年、弘学社）、『里山という物語―環境人文学の対話』（結城正美・黒田智［編著］、2017 年、勉誠出版）、『気候危機と人文学―人々の未来のために』（西谷地晴美［編著］、2020 年、かもがわ出版）、『フィールド科学の入口　文学の環境を探る』（野田研一・赤坂憲雄［編著］、2020 年、玉川大学出版部）などはそのよい例である。

なぜ環境人文学が必要とされるのか？　結城の言葉を借りれば、「これまで［人文学における環境研究の］各分野は縦割りで、独自の発展を遂げてきた。しかし環境人文学は、そのような場を提供することで、環境問題をさらに包括的に、かつ精細に研究していくこと」（Yuki 2015；訳は森田 2017b：335［強調引用者］）を可能にするからである。「そのような場」とは、著者の言葉で言えば、「〈環境〉という共通の変数をめぐって、タコツボ化された人文学諸分野の統合をうながす」（森田 2017b：335）場のことである。

先に、環境の問題は人間の問題で（も）ある、と述べた。だからこそ環境人文学が必要とされるのであり、そのキーワードの１つが、「人」の文字が入った「人新世 Anthropocene」[(3)] である。「人新世」は 2000 年に Crutzen と Stoermer が提起したコンセプトで、様々な形で定義がなされているが、Gan, Tsing, Swanson & Bubandt（2017）は次のように定義している。「人間が地球の持続的な生存可能性を左右するほど強い影響力を持つようになった地質時代に対して提案された名称」（p.G1；訳は森田 2018：8）、と。

その後、「人新世」は、日本の文脈に限って言えば[(4)]、学術雑誌『現代思想』の 2017 年 12 月号でも「人新世―地質年代が示す人類と地球の未来」として特集が組まれ、また上述の文学・環境学会の学会誌『文学と環境』も 2018 年 10 月にそのテーマを「特集＊人新世」としている[(5)]。また書籍に目を向けると、『人新世の哲学―思弁的実在論以降の「人間の条件」』（篠原雅武、2018 年、人文書院）や『エコクリティシズムの波を超えて―人新世の地球を生きる―』（塩田弘・松永京子・浅井千晶・伊藤詔

子・大野美砂・上岡克己・藤江啓子［編著］、2017 年、音羽書房鶴見書店）、『人新世の「資本論」』（斎藤 2020）等が出版されている。

上記で取り上げた『エコクリティシズムの波を超えて ― 人新世の地球を生きる ―』の「はじめに」を執筆した松永京子（2017）の卓抜なまとめによると、人新世の起源をめぐる諸説には以下の 5 つがある（pp.ix–x）。

①産業革命が始まった 18 世紀後半とする説（Crutzen らの説）
②農耕が始まった約 5,000～8,000 年前とする説
③更新世を人新世とみなす説
④地層に放射性降下物が初めて観察されるようになった 1945 年とする説
⑤米国ニューメキシコ州で世界初の核実験が行われた 1945 年 7 月 16 日とする説

このように、起源について共通の見解がないのが現状ではあるが、新聞等のマスメディアでも「人新世」という言葉を目にするようになっており、概念としてはアカデミアのみならず、人口にも膾炙した感がある。

「人新世」だけが環境人文学のキーワードではない。他にも、〈環境〉がどのように語られるかに注目する「ナラティブ」（Legler 1995）、人間以外の種も視座に含めて複数種が存在する環境を考える「マルチスピーシーズ」（Haraway 2008；Heise 2016；ハイザ 2017 [6]；奥野 2017）、体外環境から体内環境へと取り入れるものとしての「食 food」そして「食の風景 foodscape」（結城 2012）、環境ひいては人間の物質性をも考える「マテリアリティ」（Alaimo & Hekman 2008；Wilson 2008 [7]）、環境と障がいとの接点を考察する「環境障がい論」（eco–crip；Ray & Sibara 2017）、環境と身体の相互作用に注目する「超身体性」（transcorporeality；森田 2017a）や「ポストヒューマン」（Braidotti 2013）、環境とクィア（LGBTQIA）[8] との接点を考察する「クィア・エコロジー」（Morita 2010, 2013；森田 2014, 2018）、またクィアと関連して「HIV/AIDS」（Berila 2004）も射程に収めている。加えて、環境を「ケア」という医療用語から捉える動きもある（Merchant 1996；丸山 2006）。

以上、セクション 2 では環境人文学の系譜と射程を概説してきた。次のセクション 3 では、医療人文学の概要を説明しつつ、環境人文学との射程の重なりにも目配りしてみたい。

## 3. 医療人文学

医療文学研究者の Schleifer（2019）によると、医療人文学（Medical Humanities または Health Humanities）[9] は「医師および医療従事者の教育を目的とした、生医学 biomedicine 以外の学問領域の創造的・知的研究に依拠した学際的研究ならびに教育」（p.2）と定義される。その射程には「文学研究」「歴史研究」「芸術研究」「哲学」に加え、「人類学」「文化研究」「社会学」といった社会科学も含まれる。Jones, Wear & Friedman（2014）はこのリストにさらに「生命倫理学」「比較宗教学」「心理学」「ポストモダン研究」「フェミニズム」「障がい研究」「メディア研究」「生物文化研究」「芸術研究」を、

Wagner（2016）は「人間地理学」「音楽」「演劇」を追加する。

Wagner（2016）によると、“Medical Humanities”という用語の起源は 1947 年に遡る。造語したのは George Sarton で、当時、この用語は「アートを医療的治療法として利用し、また医学教育のカリキュラムを『人間化』するために」(p.7）使用された。

なぜ医療に人文学が必要なのか？　環境人文学と同様の疑問が湧くかも知れない。しかし、医療の中でも〈痛み〉を例に取り上げてみると、「痛みはまた、常に強力な人間的経験」(Schleifer 2014：5）であり、また、痛みが文化的な現象（Morris 1991）だとしたら、痛み、ひいては医療に人文学的な視点を入れざるを得なくなる。

Wagner（2016）は、医療人文学の試みを、やや文学寄りだが、6 つに分類して説明している。1 つ目は「ナラティブ」である。文学のようなナラティブを医療従事者教育に取り入れることは、患者のナラティブの曖昧さを解釈したり、その発話の社会的背景を理解するのに資する。2 点目は、筆者の言葉で纏めると「感情教育」であり、文学、ストーリー、アートを医療従事者教育に取り入れることによって、倫理観、思いやり、人道主義、エンパシーを育み、自らの偏見に気づくことができるようになる。

3 点目は「治療」で、演劇、音楽、作文をどう患者の治療に役立てられるのか、という問いに答えるものである。4 点目は「歴史」で、例えば、人間が身体をどのように取り扱い認知してきたのか、という歴史的変遷が焦点化される。5 点目は「歴史と文学」で、例えば詩のテーマや病の理解の枠組みの歴史的変遷が俎上に載せられる。

最後の 6 点目は「アクティビズム」で、既存のイデオロギーに対して異議申し立てをする詩はそのよい例である。スーザン・ソンタグによる、病に対して使われる隠喩 metaphor を批判した一連の著作（例えばソンタグ 1982）も、また別のよい例である。

日本では、1989 年に中川米造の編集による『病いの視座―メディカル・ヒューマニティーズに向けて』が出版されている。筆者の知る限り、日本初の医療人文学の書物である。日本では、生命倫理（バイオエシックス）の文脈で議論されることが多い（例えば足立 2009)。

医療人文学者の足立智孝（2009）は、Self（1988）の分類に基づいて医療人文学のアプローチを「情緒能力向上アプローチ」と「理性能力向上アプローチ」の 2 つに分ける。前者のアプローチでは、医療従事者の情緒能力の向上を目的として、「医療文学研究」「医療倫理学」「医療宗教学」「医療芸術学」に基づく教育が提供される。この 4 つの学問領域は、環境人文学に包含される「環境文学研究」「環境倫理学」「環境宗教学」「環境芸術学」に呼応し、両者の類似性が垣間見れる。

後者の「理性能力向上アプローチ」では、論理的・批判的な思考能力の向上を目的に、「医療文学研究」「医療倫理学」「医療宗教学」に加えて「医療史」や「医療哲学」に基づく教育が提供される。言うまでもなく、「医療史」と「医療哲学」は、環境人文学の「環境史」と「環境哲学」に呼応する。

以上は「医師および医療従事者の教育を目的とした」(Schleifer 2019：2）狭義の医療人文学についてであるが、広義の意味での医療人文学のキーワードを以下に取り上げてみると、環境人文学のそれと重なるものが非常に多い。実際、台湾では、環境人文学のキーワードの 1 つである〈人新世〉を冠した医療人文学の学会“The 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the

Anthropocene”が2019年6月に開催され、筆者も参加している（森田 2020c）。また、患者等の語りに注目した「ナラティブ」(Bartel 2019；Charon 2008；Murray 2019）や「障がい」(Bartel 2019；Herndl 2005；Shakespeare 2013[10])「障がい認識論 cripistemology」(Johnson & McRuer 2014）という変数にも目配りをし、加えて「(老年期の）身体性」(Twigg & Martin 2014）や身体の遺伝的・形態学的差異に係る「種内 intraspecies」「種間 transspecies」(Shildrick 2019)[11] の観点、摂食障がいと関連して「食」(Bartel 2019)、「マテリアリティ」(Herndl 2005；Wilson 2008)、「ポストヒューマン」(Murray 2019)、「クィア」(Johnson & McRuer 2014；Viney, Callard & Woods 2015)、「HIV/AIDS」(Johnson & McRuer 2014）といった変数についても忘れていない。「環境」もキーワードの1つであり、病を身体的な現象としてのみならず、環境的また歴史的な文脈から捉える動きもある（Fitzgerald & Callard 2016)。

Viney, Callard & Woods（2015）は、医療人文学者は領域横断的であり、従って“multi-tasker（同時並行で物事を進める者)”(p.4）であり“collaborator（他者・他領域との協働を進める者)”(p.7）であると述べる。上述の通り、両人文学のキーワードの重なりを考えるとその呼称は環境人文学者にも当てはまるし、延いては両人文学同士の協働も示唆される。次のセクション4ではこの「協働」について考察してみたい。

## 4. 環境人文学と医療人文学の交差点

これまで、セクション2では環境人文学の概要を、セクション3では医療人文学の概要を、それぞれ俯瞰的に眺めてきた。前者の主眼は人間 human と自然 non-human との関係性に、後者のそれは医師を含めた医療従事者や患者等の人間同士の関係性にある、といった差異はあるものの、取り扱うトピック等、共通項・類似点が多いことも確認できた。

本セクションでは両人文学の交差する点、具体的には（1）で2つの人文学がどのように協働できるかを両人文学の大きな柱の1つである文学に焦点を当てて考察し、(2）では新型コロナウイルスの時代における2つの人文学の協働のあり方を検討してみたい。後者については、コロナ禍を経験してしまった私たちは、もはや〈コロナ〉という変数を抜きにしては何事をも語ることはできなくなったからである。

### (1) 環境人文学と医療人文学との協働―文学に焦点を当てて―

ここでは環境人文学と医療人文学がどのような協働をできるかを、最近の著者のエッセイ（2020c）をベースに、特に文学の観点から考察してみたい。というのも、セクション2、3で確認したように、両人文学の大きな柱の1つが文学であるからである。

まずは環境文学の観点から考えてみると、最初に思い浮かぶのは石牟礼道子の『苦海浄土』(1969年、講談社）である。もちろん、環境文学批評（エコクリティシズム）は、『苦海浄土』で引用される厚生省への報告や医学雑誌の医療用語と、地の文との言語の対照性にも目配りをしてきたが、同書は、〈環境〉〈公害〉といった視点からのみならず、上記のような言語の対照性の観点から、また障がい、痛み、苦しみといった医療人文学の観点と合わせて読み直すことができるだろう。梅谷薫（2003）は『小説

で読む　生老病死』で「医療人間学」(p.v)「医療文化論」(p.v) の観点から『苦海浄土』を取り上げているが（pp.115–124)、その内容は逆に〈環境〉の視点が欠けているように読める。

また、環境文学研究者がしばしその作品を取り上げる作家である梨木香歩の『椿宿の辺りに』(2019 年、朝日新聞出版）もよい対象となるだろう。同小説は環境被害をテーマの 1 つとしているが、中江有里（2019）に言わせると、「物語をけん引するのは痛み」なのである。また、物語の最後で間テクスト的 intertextual に言及される梨木の『f 植物園の巣穴』(2012 年、朝日新聞出版）も人間外存在 non–human が多く登場する物語だが、実は歯の痛みが物語を牽引している（豊里 2010)。実際、医療人文学において文学的アプローチを採用する Schleifer は、*Pain and Suffering*（2014）という「痛み」と「苦しみ」を焦点化した著書を上梓しており、梨木の作品含め、環境文学研究に「痛み」「苦しみ」の視点も入れてよいだろう [12]。

また、筆者が環境文学の観点から長年研究対象としている詩人の伊藤比呂美も、医療人文学的な視点を入れてよい作品を多く生み出している。伊藤（2011）の『河原荒草』にはこんなシーンがある。

> そしてあのひげもじゃの大きな父は、このごろ病んで横たわっている、父のいうには、サンタアナが吹いて空気が乾くと、身体がばらばらに離れていくかと思うそうで、サンタアナがやんで湿気がもどると、ばらばらに離れた身体の関節の一つ一つがきしり痛むそうで、あのまっくろにたくましかった父が、すっかりやせ細り、痛みのあまりにせつない声をうめきもらす、もう父は、ひとりで立ち上がることもできない（pp.26–27）

サンタアナは、伊藤が以前居住していた米国カリフォルニア州の南部で秋から冬にかけて内陸部の砂漠から沿岸部に向けて吹く季節風である。拙論（2017a）では、本シーンを「サンタアナと『父』の身体との連続性、つまり『超身体性』」(p.282）の観点から読み解いたが、もし当時、筆者に医療人文学の視座があったのなら、「父」の「病」や「関節」、「やせ細り」「痛み」「うめき」といった点からも複眼的に読み解けたであろう。

一方、海外の環境文学作品に目を向けると、テリー・テンペスト・ウィリアムスの『鳥と砂漠と湖と』(石井倫代・訳、1995 年、宝島社）は、渡り鳥保護区の崩壊という環境問題と、作者の母の癌と死という医療問題が織り上げられた物語である。結城の論考（2010）は同作品を「サウンドスケープ」「エコフェミニズム」「エロティックな風景」の視点から読み解いた優れた評論であるが、また岩政（2017）は同作品の宗教的側面に光を当てるが、ウィリアムスの母の病と死という医療人文学的視点は観られない。

他方、医療文学の観点からすると、Schleifer（2014）はアーネスト・ヘミングウェイの「インディアン集落（Indian Camp)」[13] を取り上げている。この小作品は、主人公ニックの父親が、“インディアン”の集落で、逆子で難産の女性に対して麻酔や手術道具なしに緊急帝王切開を行い、女性は叫び声をあげ続けるが無事に出産、手技は成

功を収める。しかし赤子の父親＝夫は妻の叫び声に耐えられず自殺する、というストーリーである。このテクストを用いて医療従事者に医療人文学的教育を施す利点については言及するまでもない。一方で、同作品に登場する環境（人）文学的要素である異界としての「夜の森」や、その森に登場する「犬」と言った座標軸も見逃すことはできない（倉林・今村 2019：53）。

また各種闘病記も医療（人）文学的研究の対象であるが、環境文学として環境（人）文学研究の対象ともなっている（スコット・スロビック氏の発言；スロビック・森田・山本 2017：298）。〈自然〉が〈外なる環境〉であり、医療を受ける対象である〈身体〉が〈内なる環境〉であるとき、両者は同じ〈環境〉であり、したがって環境（人）文学と医療（人）文学が協働できない理由はない。

### (2) 環境人文学と医療人文学との協働―新型コロナウイルスの時代に―

最後に、新型コロナウイルスの時代に 2 つの人文学がどう協働できるかを検討してみたい。

（1）に引き続き、文学から一例を挙げると、砂川文次の『臆病な都市』（2020 年、講談社）は見逃すことができない作品である。同小説は、新型感染症の発生が、ちどり科の鳥である鳧（けり）が媒介していると疑われるところから始まる。この小説の初出が 2020 年の 4 月であることを考えると、コロナ禍による惨劇を占うかのように書かれていることは驚きに値する。いずれにしても、感染症とその表象 representation・言説 discourse が医療（人）文学の研究対象であり、一方、鳧のような動物とその表象が環境（人）文学の研究対象であることを考えると、同作品は両人文学の観点から分析するに値する。海外の文学では、もちろんカミュ（2004）の『ペスト』を忘れることはできない。主人公の医師リウーとともに登場人物の 1 人であるタルーは、「自然なものというのは、病菌」（p.376）なのだ、と述べ、自然＝病菌とみなしており、このような言説も両人文学の分析対象となる。

歴史学に目を移すと、思想史研究者の片山杜秀（2020）は、コロナ禍での歴史学の重要性を強調する（p.97）。農業史研究者の藤原達史（2020）はすでに新型コロナウイルスを含めたパンデミックに対して歴史研究的アプローチを採っており、これは言うまでもなく医療人文学的研究である。一方、『地球環境報告』[14]（1988 年、岩波書店）の著者として知られる石弘之は、『感染症の世界史』（2018）で「病気の環境史」（p.360）に挑戦している。というのも、病原体は「人と同じように環境の変化に耐えながら、ともに変化をしてきた」（p.360）のであり、実は「人は病気の流行を招きよせるような環境をつくってきた」（p.360）からである。このように考えると、パンデミックの（医療）歴史研究的アプローチに環境史、環境人文学の視点は欠かせなくなる。

社会学の分野では、大澤真幸（2020）が、新型コロナウイルスと人新世とを接続する試みを見せている。大澤は「現下のウイルス問題も人新世というコンテクストの中で出てくるものだと思います」（p.9）と述べ、理由として「あまりにも人間が野生動物の世界に進出しすぎているために、ウイルスからの感染を受けやすい状態になっているのです」（p.9）と説明する。そして対応策については、「人間と自然の全体的な関係というバックグラウンドの中で考えなくてはなりません」（p.10）と断言する。この発

言から演繹すると、大澤も、社会学の観点から環境人文学と医療人文学とを接続する重要性を説いていると言ってよい。

また人類学の分野では、奥野克巳（2020）が、鳥インフルエンザや新型コロナウイルスといったパンデミックを念頭に、人間–動物–病原体の三位一体の関係を考察しているし、哲学の分野では、スラヴォイ・ジジェク（2020）が、「コロナウイルスの闘争は、［中略］環境保護の闘争の一環としてのみ、可能になる闘いだ」(p.73）と喝破し、奥野もジジェクも両人文学の視点を併せ持った考察をしている。哲学者であり環境人文学者でもある篠原雅武（2020）も、新型コロナウイルスは人新世において「人間が自然を改変したことの結果としてウイルスを発生させてしまったのではないか」(p.157）と問いかけ、問題は「野生の領域と人間の領域との間に引かれていたボーダーラインが破られたこと」(p.157）にあると分析する。その解決方法として、篠原は「人間が自分をとりまく世界についてのイメージ、思想的設定を基本的に変えないことにはどうにもならない」(p.158）と話すが、これはまさに環境人文学と医療人文学の交差する点での課題である。

同様に、記号学者の石田英敬（2020）も、「コロナウイルスのような種を超えた感染は人類による環境破壊の結果である」と明言する。実際、新型コロナウイルスが「人新世における疾病」(塚原 2020：147）であり、その拡大が「人新世における人為的環境災害」(塚原 2020：151）だとしたら、〈環境〉と〈医療〉の両面から新型コロナウイルスというものを観ていかない限り、車輪の両輪のうち一方しか回っていないようなものなのである。

## 5. コーダ

本論文では、セクション 1 であるイントロダクションの後、セクション 2 で環境人文学を、セクション 3 で医療人文学を概説し、セクション 4 の（1）では特に文学における両人文学の協働の可能性について、（2）では新型コロナウイルスの時代の両人文学の協働のあり方について、それぞれ思索を巡らせた。

最後に改めて強調しておきたいのは、セクション 4 の（2）で確認したように、新型コロナウイルスの問題が環境人文学と医療人文学の交差点に（も）あるとしたら、今後は両者の協働がますます欠かせない、ということである[(15)]。新常態 new normal の導きの糸は 1 本でなくともよいのだ。

**■註**

（1）環境問題が顕在化した 1960 年代頃は、環境問題は環境(科)学によって解決されるという考え方が優勢であったが、「環境的転回」（environmental turn；野田・赤坂 2020：7）以降、環境問題は人間の問題で（も）あると捉え直されるようになった。上野（2016）は哲学者ミシェル・フーコーの『性の歴史』に言及しつつ、「フーコー以前の性研究は『性科学』と呼ばれますが、［省略］フーコー以降、性の研究は人文社会科学の対象となり、このときからセックスを自然と本能の名のもとに語ることが禁句となりました」（p.187）と述べるが、性をめぐる研究も科学から人文社会科学へと転回 turn した、という意味で同じ道のりを

辿っている。

(2) 日本での環境人文学の展開について、さらなる詳細は結城（2017）の註の（2）（pp.236–237）を参照のこと。

(3) “Anthropocene”は「人新世」の他に、「アントロポセン」（ヴィンス 2015）や「人類世」、また「人類新世」（ジジェク 2012；ハイザ 2017［拙訳］）とも訳されてきた。しかし「人新世」という言葉が人口に膾炙したとみなし、本稿では「人新世」の訳語を採用している。さらに詳しくは拙稿（2018）の注（1）（p.9）も参照のこと。なお、読み方は「じんしんせい」が多く観られるが、「ひとしんせい」も目にする（例えば斎藤 2020）。

(4) 2012 年の拙論では、2011 年まで環境 NGO で気候変動の仕事に関わっていたこともあり、大気化学者 Crutzen らが造語した“Anthropocene”という用語は既知だったため、論文中でも使用した。日本の人文学系の研究の中でこの単語が登場した論文としてはかなり初期（または初めて）のものだったと考えられる。

(5) 拙論（2018）は本特集の掲載論文の 1 つである。

(6) なお、ハイザ（2017）がマルチスピーシーズの一例として「感染症」をもたらすウィルス」（p.260）を挙げているのは注目に値する。

(7) Wilson 論文は、抗鬱剤と女性の身体＝物質との全体的な関係を、従来のフェミニズムのような政治＝社会構築的な観点ではなく、生物学的な観点から捉え直している、という意味で医療人文学的論文とも言える。

(8) **L**esbian, **G**ay/**G**ender Neutral/**G**ender Queer, **B**isexual/**B**igender, **T**ransgender/**T**ransvestite/**T**ranssexual, **Q**uestioning/**Q**ueer, **I**ntersex, **A**llies/**A**llied/**A**ndrogynous/**A**gender/**A**sexual/**A**romantic の頭文字を取ったもの。

(9) Medical Humanities と Health Humanities をほぼ同義に扱う者（Jones, Wear & Friedman 2014）もいれば、異なるものとして明確に区別する者（Crawford, Brown, Baker, Tischler & Abrams 2015；Wagner 2016；対象を医療従事者以外にも広げ、より包括的な学問領域として Health Humanities の方を捉える）、また Medical and Health Humanities や Medical Health Humanities として 2 つを統合する者もいる。本稿では 2 つをほぼ同義と扱い、訳語として「医療人文学」を採用する。尚、Medical Humanities を「メディカル・ヒューマニティーズ」「医学概論」（中川 1989）や「医療人間学」（小松 2007）と訳す者もいる。

(10) Shakespeare 論文は、障がいの個人的要素のみならず環境的要素にも目配りし、両者の相互作用を考慮しているという点で環境人文学的でもある。

(11) Shildrick の論文のタイトルは“(Micro)chimerism, immunity and temporality: Rethinking the ecology of life and death”であり、生死の生態学を再考しているという点で環境人文学的でもある。

(12) 本稿脱稿後、生田（2019）が、環境文学作家とも位置付けられる宮澤賢治の「なめとこ山」を「痛み」と「苦しみ」の観点から分析しているのを知った。

(13) 本作品の日本語訳は倉林・今村（2019）の pp.10–14 を参照。尚、“インディアン”という呼称・訳語については「先住民に対する呼称としての『インディアン』は差別的表現とされ、アメリカでは今日ほとんど使われなくなっています。しかし、本書では作品が書かれた 1910 年代という時代背景を鑑み、当時使われていた言い方をあえてそのまま表記することにしました。訳者としてはそこになんら差別意識はなく、また『ネイティブ・アメリカン』という公式的な呼称には、むしろ差別意識が隠微されていると思い、あえてそのような表現は使っていません。」（p.14）という注釈が付されている。

(14) 拙論（2012）では、同書が、ある環境 NGO スタッフのエコロジカル・アイデンティティの構築に寄与したことに言及している。

(15) 本稿脱稿後、国際ヘルスヒューマニティーズ学会で本稿をベースに発表を行ったが（森田

2020a)、同じセッションで Bradley Lewis（2020）氏（ニューヨーク大学、医療人文学）も、奇しくも、軌を一にして、医療人文学と環境人文学の接続を説いていた。詳しくは拙論（2020b）を参照のこと。

## ■参考文献

【和文献】

足立智孝（2009）.「Medical Humanities 教育について ― 登場背景と教育内容」『Bioethics Study Network』第 8 巻第 1 号，11–22 頁.

生田武志（2019）.『いのちへの礼儀―国家・資本・家族の変容と動物たち』筑摩書房.

石弘之（2018）.『感染症の世界史』角川文庫.

石田英敬（2020.5.8）.「疫病の文明論④　病の表象を見る」『日本経済新聞』朝刊，32 頁.

伊藤比呂美（2011）.『河原荒草』〔新装版〕思潮社.

岩政伸治（2017）.「ウィリアムスの作品にみる汚染の言説と大地の神話創造」白百合女子大学言語・文学研究センター（編）『環境人文学の地平』（163–175 頁）．弘学社.

上野千鶴子（2016）.「第六回　戦後日本の下半身　そして子どもが生まれなくなった」『「戦後 80 年」はあるのか ―「本と新聞の大学」講義録』（177–213 頁）．集英社.

梅谷薫（2003）.『小説で読む　生老病死』医学書院.

ヴィンス，G.（2015）.『人類が変えた地球　新時代アントロポセンに生きる』（小坂恵理・訳）．化学同人.

大澤真幸（2020）.「不可能なことだけが危機をこえる　連帯・人新世・倫理・神的暴力」河出書房新社編集部（編）『思想としての〈新型コロナウイルス禍〉』（2–32 頁）．河出書房新社.

奥野克巳（2017）.「イヌはいかに人間の言うことを理解するのか　マルチスピーシーズ民族誌の可能性」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅱ　他者としての自然』（35–53 頁）．勉誠出版.

――（2020）.「『人間以上』の世界の病原体　多種の生と死をめぐるポストヒューマニティーズ」『現代思想』第 48 巻第 7 号，207–215 頁.

片山杜秀（2020）.「いまこそ五族協和の精神を思い出せ」『Voice』第 513 号（令和 2 年 9 月号），90–97 頁.

カミュ，A.（2004）.『ペスト』（宮崎嶺雄・訳）．新潮社.

倉林秀男・今村楯夫（2019）.『ヘミングウェイで学ぶ英文法 2』アスク出版.

小松楠緒子（2007）.「視聴覚教材を用いた医療人間学の試み ― 薬科大における実践を通して」『明治薬科大学研究紀要』第 37 号，89–98 頁.

斎藤幸平（2020）.『人新世の「資本論」』集英社.

篠原雅武（2020）.「インタビュー　新しい感覚の構造に私たちは気づきつつある　エコロジーの観点から見たパンデミック」『ele-king 臨時増刊号　コロナが変えた世界』（155–164 頁）．P ヴァイン.

ジジェク，S.（2012）.『終焉の時代に生きる』（山本耕一・訳）．国文社.

――（2020）.『パンデミック　世界を揺るがした新型コロナウイルス』（斎藤幸平・監修，中林敦子・訳）．国文社.

スロビック，S.・森田系太郎・山本洋平（2017）「インタビュー『二五年後』のエコクリティシズム」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅱ　他者としての自然』（287–332 頁）．勉誠出版.

ソンタグ，S.（1982）.『隠喩としての病』（富山太佳夫・訳）．みすず書房.

塚原東吾（2020）.「コロナから発される問い　二一世紀のコロンブス的交換，『人新世』における『自然』」『現代思想』第 48 巻第 7 号，145–155 頁.

豊里真弓（2010）.「非近代への志向　梨木香歩『f 植物園の巣穴』における身体性と異界」『水声通信』第 6 巻第 1 号（no.33），215–220 頁.

――（2014）.「環境人文学」小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江（編著）『文学から環境を考える　エコクリティシズムガイドブック』（275–276 頁）．勉誠出版.

――（2015）.「環境人文学と文学研究」『文化と言語』第 82 巻，103–112 頁.

中江有里（2019.6.29）「〔書評〕椿宿の辺りに　痛みに導かれ過去たゆたう」『日本経済新聞』朝刊，28 頁.

中川米造（編著）（1989）.『病いの視座　メディカル・ヒューマニティーズに向けて』メディカ出版.

西谷地晴美（2020）「おわりに ― 気候危機と人文学」西谷地晴美（編著）『気候危機と人文学 ― 人々の未来のために』（172–178 頁）．かもがわ出版.

野田研一・赤坂憲雄（2020）.「対談『環境人文学』とは」野田研一・赤坂憲雄（編著）『フィールド科学の入口　文学の環境を探る』（6–52 頁）．玉川大学出版会.

ハイザ，U. K.（2017）.「未来の種（しゅ），未来の住（す）み処（か）― 環境人文学序説」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅱ　他者としての自然』（森田系太郎・訳，249–268 頁）．勉誠出版.

藤原辰史（2020）.「パンデミックを生きる指針 ― 歴史研究のアプローチ」村上陽一郎（編著）『コロナ後の世界を生きる ― 私たちの提言』（2–22 頁）．岩波書店.

松永京子（2017）.「はじめに」塩田弘・松永京子・浅井千晶・伊藤詔子・大野美砂・上岡克己・藤江啓子（編著）『エコクリティシズムの波を超えて ― 人新世の地球を生きる ―』（ix–xxi 頁）．音羽書房鶴見書店.

丸山正次（2006）.『環境政治理論』風行社.

森田系太郎（2012）.「Nature writing cultivates ecological identity: A case study of an environmental NGO in Japan」『文学と環境』第 15 号，17–27 頁.

――（2014）.「Toward a queer environmentality of space/place: Caffyn Kelley's ecopoem "Space"」『文学と環境』第 17 号，17–28 頁.

――（2017a）.「『超身体性』で読み解く伊藤比呂美の『河原荒草』―『二つの自然』を超えて」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅰ　文化のなかの自然』（271–289 頁）．勉誠出版.

――（2017b）.「おわりに ―〈他者〉の政治学と環境人文学の地平」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅱ　他者としての自然』（333–339 頁）．勉誠出版.

――（2018）.「〈クィア〉な人新世に向けて」『文学と環境』第 21 号，8–10 頁.

――（2020a, October–November）.「医療人文学と環境人文学の交差点」ヘルスヒューマニティーズ全体にかかわる理論と展望，第 9 回国際ヘルスヒューマニティーズ学会，於・オンライン.

――（2020b）.「環境人文学と医療人文学の邂逅？ ― 第 9 回国際ヘルスヒューマニティーズ学会に参加して」『ASLE–J Newsletter』［文学・環境学会のウェブサイトに掲載予定］.

――（2020c）.「The 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the Anthropocene（2019 年 6 月，於台湾・淡江大学）報告」『ASLE–J Newsletter』第 48 号，7–8 頁．令和 2 年 9 月 5 日 https://www.asle-japan.org/publications/newsletter/ より情報取得.

山本洋平（2017）.「はじめに」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅰ　文化のなかの自然』（i–vii 頁）．勉誠出版.

結城正美（2010）.「荒野のエコーシステム　テリー・テンペスト・ウィリアムス『鳥と砂漠と湖と』を読む」『水の音の記憶　エコクリティシズムの試み』（121–149 頁）．水声社.

――(2012).『他火のほうへ　食と文学のインターフェイス』水声社.
――(2017).「環境人文学の現在」野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）『環境人文学Ⅱ　他者としての自然』(235–248 頁). 勉誠出版.

【外国語文献】

Alaimo, S., & Hekman, S. (2008). *Material feminisms*. Bloomington, IN: Indiana University Press.

Bartel, H. (2019, June). *Re–evaluating narratives of illness and recovery: Writings on male eating disorders*. Paper presented at the 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the Anthropocene, Tamsui, Taiwan.

Berila, B. (2004). Toxic bodies? ACT UP ' s disruption of the heteronormative landscape of the nation. In R. Stein (Ed.), *New perspectives on environmental justice: Gender, sexuality, and activism* (pp.127–136). Piscataway, NJ: Rutgers University Press.

Braidotti, R. (2013). *The posthuman*. Cambridge, England: Polity Press.

Charon, R. (2008). *Narrative medicine: Honoring the stories of illness*. Oxford, England: Oxford University Press.

Crawford, P., Brown, B., Baker, C., Tischler, V., & Abrams, B. (2015). *Health humanities*. Basingstoke, England: palgrave macmillan.

Crutzen, P.J., & Stoermer, E. F. (2000). The "Anthropocene." *Global Change Newsletter*, *41*, 17–18.

Fitzgerald, D., & Callard, F. (2016). Entangling the medical humanities. In A. Whitehead & A. Woods (Eds.), *The Edinburgh companion to the critical medical humanities* (pp.35–49). Edinburgh, England: Edinburgh University Press.

Gan, E., Tsing, A., Swanson, H., & Bubandt, N. (2017). Introduction: Haunted landscapes of the Anthropocene. In A. Tsing, H. Swanson, E. Gan & N. Bubandt (Eds.), *Arts of living on a damaged planet: Ghosts of the Anthropocene* (pp.G1–G14). Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.

Haraway, D. J. (2008). *When species meet*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.

Heise, U. K. (2013). Globality, difference, and the international turn in ecocriticism. *PMLA*, *128*(3), 636–643.

――(2014). Comparative literature and the environmental humanities. *ACLA Report on the State of the Discipline 2014–2015*. Retrieved July 25, 2020, from https://stateofthediscipline.acla.org/entry/comparative-literature-and-environmental-humanities

――(2016). *Imagining extinction: The cultural meanings of endangered species*. Chicago: The University of Chicago Press.

Herndl, D. P. (2005). Disease versus disability: The medical humanities and disability studies. *PMLA*, *120*(2) (March 2005), 593–598.

Johnson, M. L., & McRuer, R. (2014). Cripistemologies. *Journal of Literary & Cultural Disability Studies*, *8*(2), 127–147.

Jones T., Wear, D., & Friedman, L. D. (2014). The why, the what, and the how of the medical/health humanities. In T. Jones, D. Wear & L. D. Friedman (Eds.), *Health humanities reader* (pp.1–10). New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Legler, G. (1995, October). *Narrative scholarship: Storytelling in ecocriticism*. Paper presented at the 1995 Western Literature Association Meeting, Vancouver, Canada.

Lewis, B. (2020, October–November). *Planetary health humanities: Responding to COVID times*. Paper presented at the 9th International Health Humanities Conference, online.

Merchant, C. (1996). *Earthcare: Women and the environment*. New York: Routledge.

Morita, K. (2010). Queer ecopoet?: An analysis of "Chitô[Tito]" by Japanese poet Hiromi Ito. *The Paulinian Compass*, *1*(4), 101–120.

——(2013). A queer ecofeminist reading of "Matsuri [Festival]" by Hiromi Ito. In S. C. Estok & W.-C. Kim (Eds.), *East Asian ecocriticisms: A critical reader* (pp.59–73). New York: Macmillan.

Morris, D. (1991). *The culture of pain*. Berkeley, CA: University of California Press.

Murray, S. (2019, June). *Critical methodologies in the medical humanities*. Paper presented at the 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the Anthropocene, Tamsui, Taiwan.

Ray, S. J., & Sibara, J. (Eds.) (2017). *Disability studies and the environmental humanities: Toward an eco-crip theory*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.

Schleifer, R. (2014). *Pain and suffering*. New York: Routledge.

——(2019, June). *Practical reasoning: How the experience of the humanities can help train doctor*s. Paper presented at the 2019 Research Institute for Interdisciplinary Medical Humanities in the Age of the Anthropocene, Tamsui, Taiwan.

Self. D. (1988). The pedagogy of two different approaches to humanistic medical education: Cognitive vs affective. *Theoretical Medicine*, *9*, 227–236.

Shakespeare, T. (2013). The social model of disability. In L. J. Davis (Ed.), *The disability studies reader* (4th ed., pp.266–273). New York: Routledge.

Shildrick, M. (2019). (Micro)chimerism, immunity and temporality: Rethinking the ecology of life and death. *Australian Feminist Studies*, *34*(99), 10–24.

Spector, M., & Kitsuse, J. I. (1977). *Constructing social problems*. Menlo Park, CA: Cummings.

Twigg, J., & Martin, W. (2014). The challenge of cultural gerontology. *The Gerontologist*, *00*(00) (June 2014), 1–7.

Viney, W., Callard, F., & Woods, A. (2015). Critical medical humanities: Embracing entanglement, taking risks. *Medical Humanities*, 41, 2–7.

Wagner, C. (2016). Introduction: 'People bleed stories': Illness, medicine and poetry. In C. Wagner & A. Brown (Eds.), *A body of work: An anthology of poetry and medicine* (pp.1–24). London: Bloomsbury.

Wilson, E. A. (2008). Organic empathy: Feminism, psychopharmaceuticals, and the embodiment of depression. In S. Alaimo & S. Hekman (Eds.), *Material feminisms* (pp.373–399). Bloomington, IN: Indiana University Press.

Yuki, M. (2015). An environmental turn in Japan studies and history. *H-Net Reviews in the Humanities & Social Sciences*. Retrieved August 9, 2020, from https://www.h-net.org/reviews/showrev.php?id=42157